

ニッポン 人・脈・記

ガンジーの国はどこへ<sup>13</sup>

日本の勇気に魅せられて



須田アルナさん

津波を村人に知らせて避難させた逸話「稲むらの火」を子供時代に聞き、日本を「勇気の国」とあこがれて来日したインド人がいる。

横浜市内に住む須田アルナ(55)。日本で働くインド女性経営者の草分けだ。

「稲むらの火」は、1854(安政元)年の南海地震で津波に襲われた和歌山の村(現在の広川町)の話だ。「醬油造りをしてた浜口椿蔵が津波を知り、刈り取った稲の束に火をつけ、村人に知らせたとされる。

これをもとに英語で小説を書いたのが、日本研究者のラファディオ・ハーン(小泉八雲)。執筆は明治三陸地震(1896年)の直後だった。これがインドに伝わったらしい。

インド西部で育った須田は3歳ごろ、教師の父から童話仕立てで聞かされた。稲むらに火をつけて難を知らせたのは、幼い少年とされていた。「日本には勇気のある人々がいるなあ。日本に行けば、自分も勇気のある子になれる」と日本行きを夢見た。

当時のネール首相が訪日し、帰国後の演説で日本の戦後復興の努力をたたえたことも、日本へのあこがれを募らせた。

須田はインドの大学で日本企業の技術に関心を抱き、キ

ヤノンに入社。同社初の外国人管理職になった。日本人と結婚して退社し、今はIT企業を営む。

須田は言う。「東日本大震災でも、被災地の人々は勇気をもって日々戦っているのを感じます」

一方、日本をよく知るがゆえに、企業文化などについて手厳しい。「日本人は新しいことに挑戦する勇気が衰えていませぬか。文化の同質性の壁を破り、失敗を恐れずに挑むべきです」

多くの民族や宗教が息づくインドの強みは多様性だ。異文化の橋渡しにたけてい

東京・丸の内富士ビルに、インド企業が集まる「丸の内インド・エコノミックゾーン(IEZ)」がある。会議室を共有して家賃を割安にし、昨年夏から9社が多様な事業を展開する。

英語サービス会社を営むムンバイ出身のアビシエイク・ゴエル(32)は、2001年の初来日が忘れられない。

当時は大学生で、インドでも廃棄物リサイクルが事業化できないかと考え、日本の環境技術の研修を受けに来た。ところが、東京の研修先で大学教授の言葉に驚いた。「君は英語のネイティブ・スピーカーでしょ。私の英語の論文を書き直してください」

インドでは教授の論文を学生が直すなどあり得ない。戸惑ったが、直して送ると、1万円程度の謝礼がもたらえた。「日本では英語のサービスが事業になるのか」。兄と2人で02年、英語の校正や翻訳、ホームページ作成などをする企業を設立した。

世界の学会で過去10年に発表された英語の論文数は、情報会社トムソン・ロイターによると、米国(2997万件)に次いで日本(77万件)は2位。だが、参考文献として言及される数は米英独に次ぐ4位で、「英語の表現力の差が現れている」とゴエル。

ムンバイの本社は当初3人だったインド人スタッフが、今や380人。科学の分野別に学位を持つ専門家を集めた。それでも人件費は日本の3割程度。日本の大学や大手書店と提携し、年間に約2万件の論文を校正する。

ゴエルの会社は、日本語が堪能な人材も集め、事業を強化中だ。そのひとり、ニヤンタ・デシムバンデ(38)は映画で日本に関心を持ち、高校時代には日本語論大会で優勝した。「インド教学」では日本語の本を出し、テレビにも出演した。

今はムンバイを拠点とし、震災後は知日派としてインドのメディアに登場して日本にエールを送っている。

IEZのまとめ役は、コンサルタント会社経営のサンジーブ・スィンハ(38)だ。96年に来日し、世界に広がる人脈を武器に日本企業のインド投資を支援してきた。震災の日には東京で秋田の銀行員と会い、東北とインドの人材交流を協議していた。スィンハは言う。

「日本はグローバル化に弱いのもっと世界を見ようと言ってきたが、震災復興にみんなが協力する日本人の姿はすごい。今、世界中が日本に学ぶ時が来ています」

(竹内幸史)



アビシエイク・ゴエルさん(右)とサンジーブ・スィンハさん